発掘ニュース 100

法勝寺八角九重塔に葺かれた瓦

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

塔跡の全景（南から）

八角九重塔の発見　2010年、京都市動物園内の発掘調査で、法勝寺八角九重塔の地盤改良跡が見つかりました。八角形の地盤改良跡の総面積は推定820㎡で、深さは約1.5mありました。直径50cmから70cmもある巨大な河原石を混ぜた粘土を丁寧に突き固めて構築され、見た人誰もがここに高さ約81mの八角九重塔が建っていたことを疑わない、圧倒的な存在感を放っていました。

法勝寺は後に院政を開始することとなる白河天皇が建立した寺院であり、その造営は国家的大事業でした。承保2年（1075）に造営が開始され、東西250m以上、南北300m以上ともされる広大な寺域の中に、東大寺大仏殿に次ぐ大きさの巨大な金堂や阿弥陀堂、五大堂など多くの堂宇が建てられました。その中でも、前例のない八角九重という形状の塔の建造は、まだ二十代の若い白河天皇にとって威信をかけた事業であり、当時の最高の土木・建築技術を結集して建築されたと考えられます。今回の調査では、それらを証明する重要な成果を得ました。

瓦葺の塔　この調査では、地盤改良の規模と工法が判明したことに加え、もう一つ重要な発見がありました。調査中に多量の瓦が出土したことです。これまで八角九重塔は、暦応5年（1342）の焼失について記された『太平記』に岡崎在家の失火が塔の檜皮に焼きついたとの記述があることから、檜皮葺に復元されているものが多くみられました。しかし、他の文献史料には瓦が葺かれていたことを示す記述があり、また今回の調査成果からも八角九重塔は瓦葺であった可能性が非常に高くなりました。

創建瓦　今回出土した瓦の中でも注目されるのが、梵字の「𑖀（アーク）」1字を大きく配置する梵字文軒丸瓦と、「𑖨（カ）・𑖪（バ）・𑖀（ア）・𑖮（ラ）・𑖭（キャ）」の5文字が配置される梵字文軒平瓦です。この軒丸瓦と軒平瓦は、意匠や胎土、焼成が共通し、セット関係にあるものと考えられます。この両者は出土した軒丸瓦・軒平瓦の中で最も多くの割合をしめることから、創建時に葺かれた軒瓦である可能性が高いと考えられます。

また、梵字文軒平瓦には赤色顔料のベンガラが付着しているものが多く見られました。これは塔を造る際にまず瓦を葺き、その後で軒先の部材に色を塗ったために付着したものと考えられ、このこともこの瓦が創建瓦であることの裏付けとなります。同じ梵字文瓦は他の遺跡からも出土していますが、まとまって出土した数量としては今回の調査が圧倒的に多く、また法勝寺金堂跡の調査でも出土していません。先に建てられた金堂から転用したものではなく、八角九重塔のために製作された瓦であると考えられます。ただし、梵字文瓦以外にも多種類の軒瓦が出土しており、梵字文瓦が軒のすべてに葺かれたわけではないようです。最も目立つ部分に象徴的に用いられた可能性が考えられます。

梵字文瓦の意味　この梵字文軒丸瓦の「𑖀」は1字で胎蔵界大日如来を表し、軒平瓦の「𑖨・𑖪・𑖀・𑖮・𑖭」は、五大種子の「𑖀」「𑖪」「𑖮」「𑖨」「𑖭」を並べ替えたもので、やはり胎蔵界大日如来を表したものです。法勝寺は、金堂には胎蔵界五仏が安置され、八角九重塔には金剛界の五智如来が安置されたことから、金堂と塔をもって両界曼荼羅の世界を創出していたとされます。しかし、塔内部の金剛界五仏と屋根瓦の胎蔵界大日如来を用いて八角九重塔のみでも両界を表徴する意図があったとすれば、これらの梵字文瓦は八角九重塔に非常に相応しい瓦であると言えます。仏教による国家鎮護を目指した白河天皇の思想を強く反映したものだったのではないでしょうか。

再建瓦　八角九重塔はその強固な地盤改良のおかげか地震で倒壊することはありませんでした。しかし、承元2年（1208）、落雷により焼失してしまいます。建保元年（1213）には再建された塔が完成します。この再建された塔に葺かれたと考えられる瓦も多数出土しています。そのうちの一つが、中心に「九」という字が記された蓮華文軒丸瓦です。まさしく九重塔の「九」をあらわしたものであり、これもまた八角九重塔に相応しい瓦と言えるでしょう。

おわりに　これまでも塔の推定地周辺では多くの瓦が採集されていましたが、本格的な発掘調査で塔に関わる瓦が出土した意義は大きく、同時に塔の外装に用いられたと考えられる瓦塼や凝灰岩製の塼なども出土しています。これまで幻とも言われ、地上に痕跡を残さない八角九重塔にとって、こうした塔の外観の復元につながる資料を得られたことは大きな成果となりました。　（柏田有香）

出土した瓦・土製品